調査報告

カザフ騎馬鷹狩文化のイヌワシ捕獲術／産地返還にみる 環境共生観の民族誌

Ethnography of Environmental Guardianship about Traditional Eagle Capture
and Release Custom in Altaic Kazakh Falconry, Western Mongolia

相馬 拓也
SOMA Takuya

(2016年2月12日受付 2016年5月30日受理)

モンゴル国西部アルタイ地域の遊牧民には、イヌワシ(*Aquila chrysaetos daphanea*)を鷹狩用に捕獲・馴致する伝統が受け継がれている。鷹使いたちは、巣からヒナワシ“コルバラ”を捕獲するか、成鳥“ジュズ”を罠や網で捕獲する方法でイヌワシ(雌個体のみ)を入手する。そして4～5年間狩猟を共にしたのち、性成熟を機として再び自然へと返す「産地返還」の習慣を「鷹匠の掟」としてきた。しかし近年、こうした環境共生観の伝統知は熱心に実践されているとは言い難い。一部のイヌワシの交換、取引、転売は、地域の遊牧民や鷹匠にとって「現金収入」「生活資金源」となることもある。現存のイヌワシ飼育者(n=42)へのインタビューから、1963年～2014年までの52年間で入手履歴222例／離別履歴167例が特定された。しかし新規参入者の停滞に反してイヌワシ入手件数は増加する傾向にある。またイヌワシとの離別では、「産地返還」された個体は47.7%とそれほど高くはなく、「死別」「逃避」が全飼養個体の38.0%を占める。こうした結果からは、カザフ騎馬鷹狩文化がイヌワシ馴化・飼養の伝統知とともに連綿とつちかわれた自然崇拜観の継承・実践も鷹使いたちに徹底させる必要が、いま浮かび上がっている。

Tradition of horse-riding falconry and eagle capture custom has been still practiced at a nomadic community of Altaic Kazakhs in Bayan-Ölgii Province in western Mongolia. Eagle hunters normally capture their eagles either from the nest or with net/trap from wild. According to the eagle master's rule, hunting eagles used to be released to the wild again when they reach 4–5 year-old adult by reason of sexual maturity. Nevertheless this tradition endorsed by Kazakh's environmental guardianship, it is now under disappearance and even has been turned into business opportunity for income acquisition with exchange or sales of eagles. With my interview works, captured 222 eagles and separated 167 eagles were specified from 1963–2014. Although new participants are stagnated, a number of captures is gradually increasing for these years. In addition, traditional capture and release custom is not actively chosen, and then “death” and “escape” dominated 38.0% of all separation. This means that TEK and philosophy of nature guardianship need to be succeeded and re-stressed among local horse-riding falconry.

キーワード: 生物資源保護, イヌワシ, 環境共生観, バヤン・ウルギー県, モンゴル西部, 鷹使いの伝統知

Key words: Altaic Kazakhs, Golden Eagle, Environmental Guardianship, Bayan-Ölgii Province, Western Mongolia, Traditional Ecological Knowledge (TEK) by Eagle Hunters

I はじめに

モンゴル国西部アルタイ地域には、メスのイヌワシ(*Aquila chrysaetos daphanea*)を鷹狩用に馴致する騎馬鷹狩の伝統が受け継がれている(相馬2012a, b, 2013a, b, 2014a; 日本放送協会(NHK) 2003, 2010, 2015; Soma 2012a–d, 2013a, b, 2014, 2015)。鷹匠(以下、鷹使い／イーグルハンター)は巣からヒナワシを捕獲するか、成鳥を罠や網で捕獲してイヌワシを入手する。そして4～5年間狩猟を共にしたのち、再び自然へと返す

「産地返還」の習慣を鷹使いの掟としてきた(相馬2015a, b)。しかし近年、イヌワシの乱獲や、交換、取引、転売は、地域の遊牧民や鷹使いにとって「現金収入」「生活資金源」となりつつある(図1)。そのため、地域の人々はイヌワシの巣を発見しても、周囲に他言しないようになっている(Soma and Sukhee 2014)。生存が危ぶまれる大型猛禽類を、鷹狩に使用することにも批判の声が聞かれることもある。

鳥類の保全生態上、世界的に密猟の危機にある猛禽はハヤブサである。鷹狩用か否かを問わず、ユーラシ

ア大陸全域でその棲息は脅かされている。たとえば2007年9月24日、寧夏回族自治区中寧県では、24人の外国人密猟グループがハヤブサの密猟で逮捕された。中国北方からモンゴル高原にかけてはハヤブサの繁殖地となっていることから、全員隣国の中央アジア諸国からの「出稼ぎ密猟者」だったとされている(RecordChina 2007)。またインド北東部のナガランド州では、毎年およそ12～14万羽ものアカアシチョウゲンボウ *Falco amurensis* が密猟され、その大部分は燻製などの食用として売却されている(ナショナル・ジオグラフィック2012)。一方、パキスタンでは、2005年には2,000羽程度だったハヤブサの生息数が、紛争続きで密猟者が締め出されたことにより、2008年には8,000羽にまで大幅に改善したという皮肉な事例もある(Inter Press Service 2013)。日本での猛禽捕獲は、沖縄県の伊良部町で、食用を目的としたサシバ *Butastur indicus* 捕獲の風習がかつてあった(現在は禁猟)(琉球新報1999)。日本の弓道ではイヌワシの尾羽を矢羽に利用するため、かつて本調査地バヤン・ウルギー県には不定期に羽根の買い付けに日本人が訪れることもあった。しかし販路が開けた反面、ワシの羽根“カウルスン”をむしり取って売るためだけに多数のワシが捕獲される皮肉な結果を招くことにもなった[U-01氏談]。そのため現金収入の機会が、ありとあらゆる手段や機会をもって経済的欲求を満たそうとする貪欲なカザフ人社会に負の影響も生み出してしまった側面がある。現在は羽根の販売目的でイヌワシが乱獲されることはほぼ見られなくなった(日本弓道連盟の2015年1月の準則により、「矢羽の適正入手証明書(トレーサビリティ証明書)」のない矢羽の購入は原則として禁止されている(日本弓道連盟2015))。

モンゴル西部地域の猛禽類取引の現状は、いまだに漠然としている。野生動物の違法取引や、中国、ロシア、アラブ諸国への密売が指摘されているものの、イヌワシに限っていうと、現地で生活していても外国人や国外への売却などの情報や噂はほとんど耳にすることはなかった。牧畜社会で450日間以上暮らした経験からすると、外国人による野生動物捕獲や現地生活者による捕獲でも、それらの情報は牧畜社会のネットワークを通じて瞬時にあまねく人々へと伝わった。そしてイヌワシは鷹狩の盛んなアラブ諸国や西欧では一

般的には用いられない。イヌワシは中央アジアのカザフ人とキルギス人の騎馬鷹狩猟でのみ馴致される(相馬2008)。モンゴル、中国、カザフスタン、キルギスの全域を合わせても、鷹使いの数はすでに300人に満たなくなっている。また飼養と維持に莫大な給餌費用が必要とされるため、ペットや愛玩用にも需要があるとは考えにくい。そのため、イヌワシそのものはモンゴル外部への密猟対象となりにくく、乱獲などの人的被害の影響は比較的寡少のような印象も受ける。現代のアルタイに生息するイヌワシをおびやかす最大の脅威は、地元カザフ鷹使いによる高頻度な捕獲や、未熟な飼養術に由来する死亡事故などに見出される可能性がある。そのため、モンゴルの「騎馬鷹狩文化」の地域研究にとどまらず、世界に広がる鷹匠と鷹狩文化をとりまく生物資源保護、環境影響評価、鳥類保全生態などの課題も見据え、本論では以下3つの事案を明らかにした。

- (1) 地元の人々に伝わるイヌワシの鷹取術や鷹取場を特定した
- (2) 鷹使いたちによるイヌワシの捕獲手段、頻度、飼養期間、離別の理由を定量調査により明らかにした。
- (3) イヌワシの入手経路と地域間取引／交換の実態を部分的に解明した。

当該分野の先行研究が皆無である状況を受け、本論では上記の知見を「生態学的伝統知 Traditional Ecological Knowledge (TEK)」として記録し、地域固有の「民族鳥類学 ethno-ornithology」から派生した知的資源

図1 イヌワシの巣と鷹使い
Figure 1 Golden Eagle nest and an eagle master

表1 産地・方法・年齢別イヌワシの捕獲数

Table 1 A number of captured eagles by origin, method, and age

産地	捕獲場所 (n=76地点)	入手方法						合計	入手時年齢（数え年）										合計	捕獲後		
		巢	網	罨	購入	交換	贈呈		1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	<10歳		地元で飼養	他地域で飼養	
アルタイ	アルタイ周辺	1	1		3				1	1	2							1		2	3	
	サルゴビ	3		1					3	1										4		
	サルゴビノオルタサイ	1							1											1		
	シエグルタイ	2							2											2		
	ジャランガシュ		1	2					1		1			1						3		
	ソルトムスクタン	1							1											1		
	トゥクテルスケイ		1														1			1		
	トシュン		1								1									1		
	トルボ				1				1												1	
	ボロー・ボログスン	2						1		3										3		
ヨルト	4							26	4									26	4			
アルタンツォグツ	ツォグツ周辺	2	2		2	1			3	2	2									4	2	
	エルゲト	1							1											1		
	オヌ	2						1	3											3		
	カラガント	1							1											1		
	テクト	3							3										15	3		
ウランフス	ウランフス周辺	1			2	1	1		1	1		1	1	1						2	3	
	アラルトゥバ				1						1									1		
	オイグル	1	1		9		1		2	2	4	2	1	1						5	7	
	オルタタウノサルブラク					1				1											1	
	カラタウ	1	1		1				1	1		1								2	1	
	コクシヨク				1					1										1		
	サルトガイ					1															1	
	バヤンズルフ	2	1		1				4					1						4		
	フルン・ハイルハン	1		3				32	1	1	2								32	4		
	サグサイ	サグサイ周辺	13		3	7	5	2		15	10	2	2	1							25	7
カク（ツェンガル・ハイルハン）			1								1									1		
カグルガト（ウムヌゴル）			1											1						1		
カラタウ				1		1					1	1								2		
カラガント		1							1											1		
キインウヤ（ダイン）		1							1												1	
コシエイト		1							1											1		
コクンゲイ（コシエイト）		1							1											1		
コラガシュ（ダイン）		1							1											1		
ジェルドウ・カプルガ				1								1								1		
シャグル（ダイン）		1							1											1		
シンダワー			1						1											1		
タイルタイ・タウ		1							1											1		
ダイン					1				1												1	
テレクト		1							1											1		
ヌレト		1									1										1	
ブケン			1							1										1		
ブケンタウ		1							1											1		
ブテウ							3				1	1	1	1						3		
フルン・ハイルハン		1											1							1		
ホイロー		1	1											1					1			
ムズタウ	2	1						2		1			1						2	1		
モンゴル・ダラー（ダイン）	1						57	1										57	1			
ツェンゲル	ツェンゲル周辺		2		3	5	1		2	4	1	2	2							1	9	
	アクコル		2						2											2		
	カラゴル	1						14	1										14	1		
デルーン	デルーン周辺	1	3	3	11	2	3		4	12	4		1				1				22	
カラタウ				1				23			1								23		1	
トルボ	トルボ周辺	2	1		3	2	2		5	4	1									6	4	
	ウスゲン・アルジャク	1								1										1		
	コグアドゥル			1						1										1		
	サイル			3	1				2	1	1									4		
ベール			1				17		1										1			
ノゴンノール	ノゴンノール周辺	2		1	1				3					1						3	1	
	アクコル（クブシャル）	1							1											1		
	アクタスタ	1							1											1		
	バクウク	12							12											12		
	バハトルク	1			1	1	1		1		1									1	3	
	ブテウ（ノゴンノール）	1							1											1		
ムクルザク		1					24				1							24	1			
バヤンノール	バヤンノール周辺				1				1												1	
	オシユク	1							1											1		
	コクムイチク	1						3	1										3		1	
ボゴット	ハトゥー						1	1										1		1		
ボヤント	ボヤント周辺				3						2	1									3	
	ウムヌ・ゴル					1					1										1	
	カラサイ	1							1											1		
	ヌレト	1						6	1										6		1	
ボルガン	ボルガン（ジャルガラント）					1	1			1									1			
ウルギー	ウルギー周辺					2	2		1	1									2			
オプス	オプス周辺						1	1				1							1			
詳細捕獲地点（n=65地点）		83	23	20	54	24	18	222	108	53	30	15	8	5	0	0	0	3	222	137	85	
																					61.7%	38.3%

図2 バヤン・ウルギー県と各調査地
Figure 2 Study Sites at Bayan-Ölgii Province

として再定義した。さらに、イヌワシを捕獲／交換することによる生物資源（とくにイヌワシの繁殖や個体数）への負荷や影響を考察した。ヒトと動物の関係誌および野生動物保護の観点から、鷲使いの態度がアルタイのイヌワシ個体数と動物資源の持続性にどのような影響をもたらすのかを、将来の課題に見据えて考察した。

II 対象地域と調査方法

本調査では、2014年9月20日～10月5日までの期間、バヤン・ウルギー県各地に在住の42名の鷲使いを対象に構成的インタビューで情報を得た。調査ではアルタイАлтай, アルタンツォグツАлтанцөгц, サグサイСагсай, トルボТолво, などの各村（図2）を訪問し、2014年10月4～6日開催の「イヌワシ祭2014」に参加した鷹匠にも聞き取りをした。イヌワシの捕獲・入手地点は、鷹匠からの聞き取りにより76ヵ所（詳細65地点）のローカルな鷹取場と捕獲実数を特定した（表1）。これら鷹取場の名称は地図上の明記のない、現地カザフ人のローカルな地理空間認識にもとづく伝統知であることから、一覧表にまとめて記した。イヌワシの入手／離別履歴については、鷲使いの記憶を頼りに遡及調査を実施した。実際のイヌワシの

営巣地点や捕獲術については、2011～12年の長期滞在期間を通じてサグサイ村、トルボ村にて実地検分・実見した（実見、実聞の直接の情報源は、相馬(2015b: 429)に掲載のコードによりインフォーマントを特定した）。

本論参照の数値、年齢、現地価格等はすべて2014年10月現在、現地通貨トゥグルク (₮: MNT) は1,000MNT=約60円で表記した。またイヌワシの年齢表記は現地の数え年（満年齢+1歳）で統一した。イヌワシの年齢は、羽根の生長量、嘴・脚部の色、体格などによって鷲使いに判定されるためこれに準じた。

III イヌワシの捕獲方法

1. 幼鳥“コルバラ”の鷹取術

イヌワシの捕獲方法には、巣立ち前のヒナワシ“コルバラ қолбала”を巣から直接捕獲する方法と、巣立ちした若鳥・成鳥“Жүзжүз”を捕獲する方法、の2種類がある。コルバラの捕獲には制約や法律などではなく、現在は地元の鷲使いならば誰でも捕えることができる [S-08, S-12, S-15, U-01]。アルタイ山脈ではワシは5月1～2週頃に孵化するため、6～7月半ばにかけて捕えられる。低山帯のワシは7月5日前後、高山帯は7月20日前後に巣立ちすると伝承されている [S-

05]. それ以降は巣を訪れてもヒナがいることはない。一般的には例年7月頃までに十分成長した、巣立ち直前のヒナが最も好まれる [S-02, S-15]. 巣立ちした直後から最初の冬（10月末頃）まで親鳥と一緒に狩りをした“アク・バラパンак барапан”が、最も狩猟に馴致しやすく、鷲使いには好まれている [S-08, U-01]. ヒナを捕獲する習慣は、とくにサグサイ、ウランフス、アルタンツォグツなど、バヤン・ウルギー県北部に多くみられる。県南のトルボ、デルーンでは、1歳未満の若鳥“バラパンбарапан”よりも野生でおのずと鍛えられたジュズを馴致する方が狩りに向いているとも言われている（後述）。

鷲使いの間では「山が高い場所ほど良いワシが営巣する」と信じられており、ツァンバグラフЦамбагарав、ツェンゲル・ハイルハンЦенгер Хаирхан、タバンボグドТаван Богд、キインウヤなどの高原が鷲取に最適とされてきた（表1参照）。サグサイ周辺では、“バクモイズ”“コルシェイト”に、優良なイヌワシが多く営巣すると伝えられ、かつてこれらの場所は鷲取場として多くのワシが捕えられた [S-02]. また、ウランフス～ロシアとの国境付近に広がるオイグル山地は、ロシア（アルタイ共和国）のコシュ・アガシКош-Агашから飛んでくる優秀なワシの産地とされている [U-01]. また、デルーンは中国側のアルタイ山地西麓からよいイヌワシが飛来する産地とされている。以下、地域の古老鷲使いの話を中心にバラパンの捕獲方法をまとめた。

山地を訪れた鷲匠たちは、はじめに上空を見上げて親ワシの所在を確認する。夏を前に鷲取場や夏牧場の上空で、ワシが舞うように旋回していればその地上付近に巣があるとされる [S-05, S-12]. このイヌワシを注視し、ヒナワシの母鳥“エネене”がエサを巣に持ち帰るところを注意深く観察する (S-08, S-15). イヌワシは見晴らしのよい岩場や崖上の縁に好んで営巣を行う。飛び立ちやすく、舞い戻りやすい場所を選定する。また巣の近辺や直下はヒナワシの糞で岩肌が白っぽくなっている。営巣地点のこの現象を鷲使いたちは“サンガル”と呼び、褐色の岩肌にイヌワシの白い糞が映えるため目視でも比較的容易に視認できる。

バラパンの捕獲にはおおむね次の2つの方法がある (S-05). ①鷲取役が巣まで降りて直接捕獲、②巣から

図3 捕えられた10日齢前後のヒナワシ
Figure 3 A captured 10 day-old eaglet

バラパンを追い出して捕獲。①の方法では、鷲取役が紐で吊したケレゲ（天幕の外壁）に乗って巣まで降りるか、木のはしごで巣まで降りる。支えとなる人物が必要なことから、バラパンの捕獲には2人以上で向かう必要がある [S-12, S-15]. ②の方法では、鷲取役が巣まで近づき、巣のなかに石を投げたり、松明の明かりをかざしたりしてヒナを驚かし、巣から飛び出たところを捕まえる [S-02]. 捕獲には2つのネットで挟みとるようにするのが良いとされる。巣にヒナが2羽いれば両方とも別々に包んで持ち帰られる。

サグサイ村でのフィールドワーク期間中、2012年5月にS-10氏による10日齢程度のバラパンの捕獲を実見した（図3）。ヒナは夏牧場では鷲小屋のなかで無事成長し、9月のイヌワシ祭2012にも同行した。ただし、これほど若いバラパンの捕獲はあまり一般的ではない。カザフ鷲匠の伝統知に照らすと、歳の若すぎるヒナワシ（おおむね4週齢以下）を捕獲することは通常行われない。

サグサイ村南北の山地周辺でワシの巣を探索したところ、2つの巣 (N_1 , N_2) が見つかった（図4a, b）（以下、S-15氏の案内により2011年8月18日に実見）。 N_1 と N_2 はソム・センターから南に約6,400 mの冬牧場で確認された。そのうち1カ所はS-15氏の冬営地の自宅から西に約1,000 m、もう1カ所は160 mしか離れていなかった。 N_1 は尖塔型の岩棚の上にあり、アクセスの困難な場所のため遠方より目視した。 N_2 は徒歩でもアクセスできる2.5 mほどの高さの岩棚の上に確認された（図4b）。巣は全長約153 cm、全幅約45 cm

a. 棚状になった崖に掛けられた巣(N₂)

b. 上部から見た(N₂)

c. 同一地点に営巣された2つの巣(N₃, N₄)

図4 サグサイ村周辺の営巣地点

Figure 4 Eagle's nest around Sagsai sum-center

で、大人の人間が入れる大きさであった(図1)。N₂の内部には、軍手、ブーツ、皮革製ポーチ、ワイヤーハンガー、布切れなどが収集されており、人間の生活空間と重なり合うイヌワシの生態がよく表れていた。巣にはヒナはいなかったが、S-15氏とともに上空に親ワシの旋回する姿を確認した。そのため、繁殖および巣立ちを済ませたイヌワシの巣と思われる。とくにN₁ ~ N₂の行動圏内にはサグサイ村南部のオルタウ冬営地が含まれており、例年9月~翌5月には6家族が牧畜生活を営んでいる。

またホブド河北岸のカインドアラル冬営地でも2つの巣(N₃, N₄)が確認できた(図4c)。これらはS-16氏の叔父が居住する冬牧場から約900mの距離にあり、同一地点に3つの営巣が確認された。2つは空巣

であったことから、同一個体の営巣地と推測される。これらは、カザフ人とイヌワシの生存空間が互いに重なり合っている一つの事例と考えられる。

2. 成鳥“ジュズ”の鷹取術

ジュズの捕獲には、「食餌トラップ法」や「投げ縄法」などいくつかのバリエーションがある。鷲使いに伝わる伝統的な方法のひとつに、エサを食べすぎて体重が増え、飛行動作の鈍くなったアク・バラパンがジュズを、網を投げて捕獲する食餌トラップ法がある。成鳥になるとイヌワシの自重は6kgを超え、上昇気流の助けがないと上手く飛翔できないことがある。この習性を利用し、はじめに上空を舞うイヌワシから視認できる開けた場所におとりの肉や動物の死骸を置

図5 トルボでの成鳥の捕獲方法
Figure 5 A trapping way for adult eagles in Tolbo County

き、ワシに十分に捕食させる。ワシが食べ終わって飛び立つところを見計らい、ネットなどで捕獲する。かつては飛翔の鈍重となったワシを騎馬で追走し、投げ網で捕えることも行われた。さらに雨天時に濡れた状態のイヌワシも、自重が増して飛行が制限されるため、網で捕まえやすいといわれる。ただし、これら昔ながらの伝統的捕獲術はもはや一般的ではなく、フィールドワークで実見することはできなかった。

現在広く行われる罠を用いた鷹取術は、次のように行われる。トルボ在住の鷹使い T-08 氏の行ったジュズの捕獲方法を以下に参照する (2012 年 10 月 8 日に実見)。はじめに、よく開けた山肌の南斜面にロシア製の鉄の罠 (いわゆるトラバサミ) を設置し、砂をおおい被せて隠しておく (図 5a)。罠の谷側に石を置

き、その上に上空からもよく視認できるように、ウサギの死骸を紐でくくりつけておく (図 5b)。イヌワシが山側から獲物に襲ったり、近づいたりする習性を利用し、おとりのウサギに近づくと罠がイヌワシの脚を捕えるように設置されている (図 5c)。訪問の前日にも、この罠で 5～7 歳齢のメスのイヌワシが捕獲された (図 5d)。しかし、右足の第二趾 (内趾) を失っていたため、すぐにリリースされた。訪問の 2 週間前にも若いオスのイヌワシが捕えられ、これもリリースされた (Soma 2015)。一般的には強力な罠を使用しなければ、イヌワシほどの巨体を捕獲することはできない。ただし、同様の方法で罠を使用せずにネットを用いた鷹取は昔から行われていた (周囲のネットに自然にイヌワシがからまるため)。そのためこうした鷹取

a. 年齢別イヌワシの入手方法

b. イヌワシの入手方法

図6 イヌワシの入手方法

Figure 6 Ways for acquisition of eagles

表2. イヌワシの入手時年齢と捕獲方法のピアソン相関係数

Table 2 Pearson Correlation between age of acquisition and capture

年齢	捕獲			取引		
	巣	網	罾	購入	交換	贈呈
1歳	0.95	-0.08	0.26	0.29	0.42	0.20
2歳	0.30	0.40	0.49	0.82	0.71	0.71
3歳	-0.07	0.43	0.38	0.83	0.24	0.42
4歳	0.11	0.08	0.04	0.48	0.55	0.34
5歳	0.08	0.39	0.13	0.65	0.74	0.45
6歳	-0.14	-0.03	0.06	0.19	-0.11	-0.03
7歳						
8歳						
9歳						
<10歳	-0.10	0.41	0.18	0.53	0.06	0.29

術は、鉄製のトラバサミが用いられるようになって以来の、最も広く行われている簡便な方法と思われる。

IV 鷺使いによるイヌワシの入手／離別履歴

1. イヌワシの入手経緯と入手時年齢

構成的インタビューを通じて42名の鷺使いのイヌワシ「入手／離別履歴」を追跡したところ、最も古い入手事例1963年から2014年まで、52年間の履歴（合計n=222例）が特定された。

イヌワシの入手方法は、次の6区分（#1. 巣からの直接捕獲、#2. 網、#3. 罾、#4. 購入、#5. 交換、#6. 贈呈）に分類して集計した。入手方法別の内訳は図6aのようになり、自然界からの「捕獲」（#1～#3）は全体の56.8%（n=126）、人づての「取引」（#4～#6）は43.2%（n=96）となった。入手時の年齢別では、全体の48.6%（n=108）が1歳齢「バラパン」の入手であった

（図6b）。年齢が1歳増えるごとに、入手比率は半減する傾向にある。とくに1～3歳齢での入手が全体の86.0%を占め、4歳齢以降のワシの馴致は全体の14.0%以下となった。とくに7歳齢以降の老齢のワシはほとんど馴化に用いられない傾向がみられた。

馴致への適正年齢別に入手経路を調べてみると、1歳齢バラパンの入手経緯は72.9%（n=82）が「#1. 巣からの直接捕獲」であった。2歳齢テルネックからは、「#4. 購入」（37.7%）と「#5. 交換」（24.5%）が入手全体の62.3%を占めている。この傾向は3歳齢（56.7%）、4歳齢（60.0%）でも変わらない。3～4歳齢の「#1. 巣からの捕獲」は、営巣中の成鳥も巣からの捕獲対象になることを示している。入手時年齢と捕獲方法のピアソン相関係数では（表2）、1歳齢ワシは「#1. 巣からの捕獲」と $r=0.95$ の値が示された。また2歳齢ワシは各種取引（購入 $r=0.82$ 、交換 $r=0.71$ 、贈呈 $r=0.71$ ）と強い相関がみられた。また3歳齢以降では、3歳齢と

図7 イヌワシとの離別方法
Figure 7 Ways for separation with eagles

「#4. 購入」($r=0.83$)と、5歳齢では「交換」($r=0.74$)と強い相関が示された。一方、4歳齢以降は捕獲全般(直接捕獲, 罠, 網,)とはほとんど有意な相関が示されなかった。ピアソン相関係数による分析から推測すると、鶯使いは年齢の高い鶯を捕獲しても馴致には用いず、リリースされるか売却, 交換, 贈呈などに回されていると考えられる。

2. イヌワシの離別方法と離別時年齢

現在飼養中の個体($n=55$)を除いたイヌワシ(合計 $n=167$ 例)の離別方法の内訳を図7a, bに示した。最も古い例1967年から2014年までの47年間の離別履歴を特定した。イヌワシとの離別方法は、次の5区分(S_1 : 解放(産地返還), S_2 : 売却, S_3 : 譲渡, S_4 : 死亡, S_5 : 逃避)に分類して集計した。

(a) 解放/産地返還: イヌワシとの離別履歴($n=167$)のうち、自然界への「 S_1 : 解放(産地返還)」は全体の43.7%($n=73$)となった。また狩猟により体の一部を痛めたための解放が5例確認された。このことから、伝統的な「 S_1 : 産地返還」は、地域の鶯使いにとってあまり熱心実践されてきたとは考えにくい。産地返還されるワシの入手時の平均年齢は2.56歳、平均使用年数は5.38年間となった(表3)。そのため、産地返還されたワシの離別時年齢は3~18歳に達していると推定され、平均年齢は7.83歳と算出された。

(b) 売却/譲渡: 「 S_2 : 売却」された個体数は、全体の3.6%($n=6$)のみが特定された。売却された個体の入手時/離別時年齢は1.67歳/1.80歳で、平均使用年数は

表3 イヌワシとの離別方法別の年齢/飼養年数
Table 3 Eagle's age of separation and tamed duration

離別方法	平均年齢		平均飼養年数
	入手時	離別時	
1. 解放	2.47	7.83	5.38
2. 売却	1.67	1.80	0.60
3. 譲渡	2.25	4.46	2.21
4. 死亡	1.44	4.78	3.33
5. 逃避	1.88	5.24	3.20
平均:	1.94	4.82	2.94

0.6年間であった。比較的若いイヌワシが売却の対象とされており、はじめから売却目的で入手されている可能性もある。「 S_2 : 売却」はとくにサグサイのS-15氏で4件、偶発的に高校生のS-17氏による1件、U-05氏による6件のみが確認された。U-05氏はイヌワシ祭や式典のためだけにイヌワシを所持するデモンストレーターである。そのため、インタビューによる自己申告を信用する限り、鷹匠間での金銭授受をとまなうイヌワシ取引が全体的な現象とは描き出せない。金銭によるイヌワシの取引はモンゴル国内の法的規制の対象でもあり、口外することには当然ながら否定的意識が伴うと考えられる。このことから売却個体の実数はいまだに判然としない結果となった。

「 S_3 : 譲渡」されたイヌワシは、全体の16.8%であった。譲渡された個体の入手時/離別時年齢は2.25歳/4.46歳で、平均使用年数は2.21年間であった。「 S_3 : 譲渡」では、4~5歳齢の比較的若いワシが対象となり、馴化のプロセスで「狩りに向いていない」「フィーリングが合わない」「近隣の鶯使い宅でワシが死んだ」

などの理由で、やり取りが行われた。

(c) 死亡／逃避：イヌワシとの「S₄ 死別」「S₅ 逃避」は、全体の36.0%を占めている。イヌワシとの「S₄ 死亡」による離別は全体の16.2%(n=27)となった。「S₄ 死亡」した個体の入手時／離別時年齢は1.44歳／4.78歳で、平均使用年数は3.33年間であった。狩猟中の死亡事故は5例が確認された。たとえば、U-01氏の“ホブドのカラゲル”がキツネとの戦闘で死亡、T-02氏所有の“アク・カナット”がクマに襲いかかったために死亡など、勇猛なワシの死亡例が武勇伝として聞かれた。その他の具体的な死亡理由を、鷲使い自身から聞き出すことはできなかった。自ら理由を話したがらなかった心理状態から察すると、病死や衰弱死による健康管理面での失敗が最もおおきな理由と推察される。

「S₅ 逃避」は全体の19.8%(n=33)を占め、「S₁ 産地返還」の次に高い割合を占めていることが示された。いわば飼養中のイヌワシ5羽中1羽が逃げ出している計算となり、かなり頻繁にイヌワシが人間界から逃避する現状が見出された。とくに強風日の訓練中や出猟中に、イヌワシが風下に飛んでしまうと、風上に容易には戻ってこれないことがある。鷹狩と鳥類学に博識だったシェイクスピアの著作にも、「タカを風下に飛ばすと、風に乗って遠くへ行ったまま鷹匠の元へは戻って来ない」の一句があり、イギリスでは「今生の別れ」を意味する慣用句として用いられることがある(ハーディング1993(1864): 68)。またイヌワシの初速揚

力を測定したところ、地上からの最大揚力が25 kgを超えることもあった。こうしたことから、とくにラポール構築の不十分なワシが、据え場所を振り切って逃げ出すことは珍しい現象ではない。鷲使いのあいだでは一般的に、年齢の高いワシほど自然界で培った野性のため、人間界から逃避する傾向があるとされている。しかし逃避個体の入手時／離別時の平均年齢は1.88歳／5.24歳で、平均使用年数は3.20年間であった。馴致段階での年齢は若く、十分に人間界で過ごす時間が確保されていたと考えられる。また逃避個体(n=33)の入手方法は、「捕獲」19件、「取引」14件で、来歴に有意な差は見られなかった。そのため、イヌワシの逃避は年齢よりもワシの個性や、とくに鷲使い自身の飼養・訓練上の不注意などに原因があると考えられる。

V 考 察

1. イヌワシ捕獲個体の地域間交換

産地の特定できているイヌワシ個体222例のうち、地元での捕獲個体が61.7%(n=137)、他地域からの引取個体が38.3%(n=85)となった(表1参照)。地域の鷲使いの飼養する個体の4割以上が、他地域で捕獲されている結果となった。全鷲使いの所持する飼養個体数(n=208)に占める他地域産イヌワシの割合をみると図8のようになる。他地域産の受入個体はアルタンツォグツで48.0%、サグサイで46.8%、ツェンゲルで42.9%、とこれら3村では全飼養個体の4割以上を占

図8 イヌワシ入手の産地間取引
Figure 8 Regional exchanges of captured eagles

図9 イヌワシ入手・離別個体数の推移(1963～2014)
Figure 9 A transition of numbers of acquisition/separation with eagles

める結果となった。またウランフス (30.8%)とアルタイ (29.0%)の2村でも、他地域産の受入が3割近く行われていた。一方、トルボ (18.8%), ノゴンノール (5.6%), デルーン (0.0%)では、地元産の捕獲個体を飼養する割合が高い。地元産/他地域産の比率は、県北で62.4%/37.6% (n=186), 県南 (トルボとデルーン)で86.4%/13.6% (n=22)となった。県南でのサンプル数の少なから、有意な検定値は得られなかった。ただし鷲使いのあいだでも、県南では優秀なワシが捕獲されるという認識が広くある。このことから、バヤン・ウルギー県ではとくに県北の各村のあいだで他地域産のイヌワシ受入が積極的に行われている傾向がうかがわれる。

こうしたイヌワシの「取引 (売買・交換・贈呈)」は、地元の鷹匠や遊牧民同士の間ではかなり昔から頻繁に行われてきた。それは制度化された「商取引」ではなく、むしろ優れたワシを腕の良い鷲使いに提供するなど、コミュニティ内における良好な社会関係のためにやりとりされた。ただし、他国やカザフ人以外への取引や譲渡は、倫理上の禁忌とされてきた。「ワシはカザフの財産だから他国へは譲らない」[S-15], また「ハヤブサだけは決して捕ってはいけない」という長老もいる [S-05]。取引には金銭での売買、家畜との交換、物々交換がなされ、ワシの個体それぞれの体格、性質、性格、状態に応じて相談のうえで値段 (交換価) が決められた [S-02, S-05, S-08]。一般的なイヌワシ (ヒナも成鳥も) 1羽の価格 (現地価) は現在

100,000～200,000MNT (約6,000～12,000円) 前後が相場とされており、ヒツジなら2～3頭分相当で取引される (S-12)。最も高いワシの売却価は700,000 MNT (約42,000円) [S-01] であった。交換価ではラクダ1頭 [S-01, S-07], 牛2頭とヒツジ1頭 [Ts-04], 馬1頭 [Ts-04, S-01, S-02, S-07, Z-01] と交換した事実も確認され、良いワシに出費を惜しまない態度も見受けられる。近年、ヒナは取引や売却の対象とされており、鷲使いだけでなく地元の牧夫たちも頻繁にイヌワシの巣を探し求めるようになっている。そのため、地域の人々はたとえ営巣地を発見したとしても、その所在地を秘匿していることも多い。

現存する鷲使いによるイヌワシの入手/離別個体数の推移 (図9) をみると、1990年頃を境に新規参入者とともに増加傾向にあり、2003年には入手件数が激増した。これは1990年以降の民主化により、伝統文化への規制がなくなったことが背景にある。長い社会主義時代を通じて、カザフ社会ではイスラーム宗教の教えや宗教行事、伝統文化の多くが政治的に抑圧・禁止されてきた。1970年代には数年間、イヌワシを保持することが禁止された時期もあった [U-01氏談]。さらに、2000年10月および2002年9月に相次いで開始された、カザフ民族文化の祭典「イヌワシ祭」の顕著な影響も見取れる。これは90年代以降のイヌワシ保持者の増加とも一致している。この時期社会主義時代に失った自文化の再制度化 (repatriation) が模索され、イヌワシと鷲使いはアルタイ系カザフ社会にとっ

ていわば民族の象徴として回帰された。2011年からの全調査対象イーグルハンター（62名）のうち、1990年以前からのイヌワシ保持者は30名、90年の民主化以降の参加者は32名でその比率はほぼ同数となっている。注目すべきことは、2010年以降は新規参加者が停滞する反面、イヌワシの入手・捕獲数は2003年のピークよりも増加傾向にある。これは鷲使いの専門的な飼養技術のTEK喪失にともなう、イヌワシの死亡や逃避事故が多発しているため、度重なる入手件数の頻度増加を反映したものと思われる。そのため、鷹狩文化への新規参加者の停滞に反して、今後イヌワシ入手件数は増加するものと見込まれる。このことは、イヌワシ個体数へ負の影響をもたらす可能性が十分にあると指摘できる。

2. 幼鳥／成鳥の飼養をめぐる選択

ヨーロッパの鷹狩でも、幼鳥eyass／成鳥haggardの飼育には賛否の意見が古く議論されている。幼鳥／成鳥にはそれぞれのメリットとデメリットがある。このことは中世イギリスの鷹匠のあいだでも論争となっていたことが、Campbell (1773: 137)の著書にも見える。Campbell自身は巣から捕獲したタカ個体の飼育を推奨しており、その育てやすい性質から、とくに5月の最終週の幼鳥個体が最良と考えていたことがうかがわれる(Campbell 1773: 143)。現代の鷹狩では世界的に、巣から捕えたヒナの飼育に重点が置かれているように思われる。成鳥を避けることには次のような理由も指摘されている(Beebe 1984: 123)。①成鳥を野生での繁殖個体として確保しておくため、②ヒトへの馴致と訓練の困難に加えてすぐに逃避する癖があること、③古くは成鳥の飼育には確立された技術があったが、現代に継承されておらず幼鳥の飼育の方がよく知られるようになったため。成鳥が逃げ出してしまうという認識は、欧米でもアルタイ系カザフの鷹狩でも共通した認識としてはっきり表明されている。

イヌワシ馴化の「伝統的な知と技法traditional art and knowledge (TAK)」が失われつつある地元の鷲使いたちにとって、コルバラの飼育はジュズよりも容易で手間と危険をとまなわない、と考えられている。しかし実際は、コルバラは成長するにつれてマスターや人間に反抗的になることや、しきりに鳴き声を立てる癖

が現れるなど、狩猟や飼養に不向きな特徴が見られることも多々ある。古くから伝わる飼養の伝統知が駆使されれば、こうした性質はすべて矯正することができた。しかし、2000年以降のイヌワシ祭への参加だけを目的とし、イヌワシをつなぎとめるだけの「デモンストレーター化」したイヌワシ所持者が増えるようになった。そして精度の高い馴致と飼養方法を継承する鷲使いは少なくなっている。加えてサグサイ周辺の鷹匠たちの間では、「コルバラだけがオオカミを捕獲できる最強のイヌワシに成長する」と信じられている(相馬2012; Soma and Sukhee 2014)。そのため、県北の鷲使いたちの間ではコルバラへの執着がとくに強い。ウルギー県北の村々でコルバラの入手・取引が盛んな理由には、鷹匠人口の豊富さだけではなく、馴化の容易さに加え、最強の“クランқыран”へ育つと信じられるコルバラへのつよい心理的愛着がその背景にある。

一方、県南のトルボやデルーンではコルバラを捕獲する習慣はほとんどみられない。たとえばトルボ村の鷲使いにはコルバラを捕える習慣はなく、むしろ「狩猟にはジュズが向いている」という共通認識がある。この見解は長老級の鷲使いにも一様に共通している。世界的に成鳥から幼鳥への飼育に比重が移る傾向があるが、これは狩猟の成果や環境負荷よりも、鷹匠にとっての飼養のしやすさが優先されている近代化の特徴と受けとれる。

たとえば、アルタイで最古老の鷲使いU-01氏は、ヒナワシ“コルバラ”の捕獲を次のように深く憂慮している。「コルバラはとるべきではない。巣からたくさんヒナを捕ったせいで、ワシの数が減ってしまった。若衆にも同じことを言っているが、いまやだれも耳を貸してはくれない。巣から捕ったコルバラは（うまく馴致できなければ）、家畜や子どもを襲うこともある。いわば父母にしつけられていない人間の子どもの同じだろう。そのため、ジュズを丹念に馴らして鷹狩をすべきなのだ。いまは飼養技術を身につけていようがなかろうが、だれでもワシを捕ってよいことになっている。だからコルバラの捕獲を規制するための法律や制度が必要なのだ」(2014年9月22日訪問)。こうした見解は、とくに長老級の鷲使いに共通している。コルバラの飼養に比重がうつる傾向は、アルタイ

系カザフでも顕著にみられるようになった鷹狩文化の近代化の特徴でもあり形骸化の兆しともいえる。

3. 失われつつあるカザフの自然崇拜観

カザフ鷲使いのならわしでは、バラパンや若鳥を捕獲し、4歳齢（満年齢3歳）になった春先に、イヌワシを捕まえた山へと再び放つ「産地返還」の習慣が行われてきた（相馬2012a）。イヌワシは3～4歳で性成熟し、雌のイヌワシは最も強壮な年齢となる。こうしたワシを山へ返すのは「自然界でつがいとなって次の世代を育て、再び強いワシにめぐり合わせてくれるように」という、カザフ鷲使いたちの祈りが込められている[U-01, T-01]（Soma 2015; 相馬2015a）。そのため3～4歳齢のワシは「母親」を意味する“Ана”と呼び表される。この「産地返還」を実践することで、鷲使いとイヌワシの交渉は好循環を続けてきた。

しかし現在、3～4歳齢での「S₁ 産地返還」の習慣はもはや熱心に行われているとは言い難く、伝統的な掟が失われつつある結果が示された。長老のU-01氏は「1羽のイヌワシとは4年間だけともにするようにし、決して何年もつなぎとめてはいけない。人間界で死なせてしまわないため自然へと解放し、育て上げたワシにも子どもを産み、育ませるために、山へと返す掟がある。この風習があるからこそ、鷲使いを再び良いワシとめぐり合わせてくれるのだ」とくりかえし指摘している。カザフ鷲使いたちが「産地返還」のならわしを継承実践することは、古来の自然崇拜観と伝統知にしたがってアルタイの自然環境を守れる保全生態観を体感的に理解していた証でもあった。そのため産地返還は、カザフ鷲使いとイヌワシとの共生観を端的に表している。しかし近年のカザフ騎馬鷹狩文化では、自然界へと放鳥されたイヌワシ個体は73件(43.7%)であり、馴化・飼養された全167件の半数に満たなかった。ただし、「S₅ 逃避」(19.8%)を含めたイヌワシの自然回帰率は63.5%となっており、くしくも技術不足などでの逃避個体数が全体の自然回帰率を押し上げている側面がある。

かつてアルタイのカザフ人社会では、自然を敬い、限りある動植物資源を有効に活用するといった、古来の「自然畏怖信仰」「ガーディアンシップ」にもとづく理念と思想があった。イヌワシと鷲使いとの最も崇

高な関係は、この「出会いと別れの物語」に見出すことができる。イヌワシとカザフの人々の関係は、「産地返還」の実践で数世紀にわたる正相関の共生関係を生み出すことで、アルタイに根を下ろした遊牧民が育んだ「自然守護観 nature guardianship」「環境共生観」を具現している。「イヌワシは空の生き物だ。だから10年以上も人間の世界でつなぎとめてはいけない。ワシも飛ぶことを欲している。山に放ち、次の世代を育ませるべきだ」[Z-01]という長老たちの畏怖の念は、かつて多くの鷲使いたちに共有されていた。T-02氏は「父が21年間ワシを飼っていて、2011年に山へ返したが、戻ってきてしまった。それから2年間ずっとエサも与え続けている。父からも“イヌワシを長くつなぎとめてはいけない。かわいそうだから…”」と諭されたことがあった[T-02]。実際に、トルボ村在住の最古老の鷲使いT-01氏（95歳）宅で、このイヌワシを実見した。おそらく自然界での狩猟方法と野性を失ったため、自然へと還れなくなったと考えられる。

しかしこうした「自然崇拜観」は、カザフ人の直面する地域経済と牧畜生産の社会・経済的困窮（相馬2014b, 2015c）を背景に、過去の遺産になっているように思われる。これは鷲使いたちに限ったことではない。近代化の過程で生産性を追求するあまりに、モンゴルの牧畜社会が「自然の恵みに対する敬意」を置き去りにしてきた結果といえる。こうしたことから、高齢になったイヌワシはさらに転売を繰り返されることもある。サグサイ村では名の知れたデモンストレーターDS-K氏は罠でイヌワシを捕えて解体し、ツメ、脚部、頭部、翼を観光客に売りさばくことが毎年見られた。またデモンストレーターDS-S氏宅では、食餌として禁じられている家畜の肝臓を与えていたため、2年間連続(2012/13)で飼養中のイヌワシが死亡した。実際には収集したデータよりも多くのイヌワシが死亡している可能性は否定できない。近年、鷹狩の評価の高まりとともに生じた観光化、デモンストレーション目的の商用化により、鷲使いたちは古来の思想に多くの意味を見出せなくなっている。

こうした背景には、イヌワシの単なる所持いわば「つなぎとめ」だけがカザフの文化表象として独り歩きし、伝統的な飼養の知と技法が軽んぜられ、継承・

実践されていないことに根源的な原因が見出される。形骸化した「見世物」「まつり」「デモンストレーション」としての鷹狩は、むしろ動物資源を圧迫し、カザフ社会が守ろうと試みる騎馬鷹狩文化の本質を壊滅させる可能性がある。デモンストレーションに傾倒するイヌワシ保持者たちがこうした利益追求を脱し、かつての鷲使いたちが自然を敬ったようなガーディアンシップの再生に回帰の本質を見出し、人類の普遍的価値として再び保全生態観の再生と向き合えるかどうか、に、カザフ騎馬鷹狩文化の今後が託されている。

VI. まとめと展望

イヌワシの捕獲はバヤン・ウルギー県の各地でみられ、取引も網の目のように行われている。そして鷲使いたちはイヌワシの営巣地点や鷹取場を、在来の地理空間認識でよく理解しており、そこにはイヌワシとの古来の共生観を読み取ることができる。しかし近年の鷹取・交換を通じた鷲使いのやりとりからは、以下(C₁, 野生生物の過剰捕獲, C₂, 狩猟用イヌワシの自然回帰率の減少, C₃, イヌワシ繁殖率と個体数への影響)にまとめたような、生物資源圧迫への危うさは拭い去れない。

(C₁) イヌワシの幼鳥“コルバラ”と成鳥“ジュズ”の捕獲方法と伝統の鷹取術は、シンプルな方法ながら高い捕獲率を誇る。バラパンの捕獲では、ベースライン調査で示したように65ヵ所のローカルな鷹取場が特定された。こうしたローカルな地理空間認識は定住者の間では薄れつつあることから、空間認識の在来知をGISなどを駆使し別途把握する必要もある。また成鳥の捕獲には鉄製のトラバサミが多用される。これはイヌワシのみならず、クロハゲワシやハヤブサなどの猛禽をはじめ、オオカミ、モウコヤマネコ、ジャコウネコなども副次的に捕獲してしまうため、生物資源の圧迫の可能性を否定できない。

(C₂) 鷲使い42名による1963年～2014年までの52年間の入手履歴222例／離別履歴167例が遡及調査により特定された。イヌワシとの離別では、「S₁, 産地返還」の習慣が廃れつつあり、「S₄, 死別」「S₅, 逃避」が全体の38.0%を占めるようになっていく。また2000年以降、鷹狩への新規参入者の停滞に反して、イヌワシ入

手件数が増加傾向にある。こうした結果からは、イヌワシ馴化と飼養の伝統知や技術継承の喪失が危ぶまれる背景が見出され、伝統知の継承・実践を徹底させる必要が浮かび上がっている。

(C₃) イヌワシの取引・交換はバヤン・ウルギー県内全域でやり取りがみられるが、とくに県北のアルタンツォグツ、サグサイ、ツェンゲルで、他地域からのイヌワシ受け入れが多くみられた。県北ではコルバラ飼養への心理的こだわりがみられ、県南ではジュズの飼育が好まれる地域性が部分的に確認された。一方で、イヌワシやヒナワシの取引は商業機会化する傾向も見られ、鷹匠や牧夫が春先に頻繁にイヌワシの巣を探し求め、営巣地点を秘匿するようになっている。

モンゴルのイヌワシの繁殖率や個体数は、西欧のような密猟や環境汚染ではなく、カザフ鷲使いによる無責任な飼養態度や地域の牧夫たちの取引への執着など、域内での人的介入によって左右されると考えられる。イヌワシの捕獲や取引にかんする実効力のある法規制や制度は、モンゴル国内では現時点では存在しない。「生物資源の保全」と「カザフ騎馬鷹狩文化の保護」は表裏一体であり、今後は地域・行政レベルでイヌワシを自然／文化双方の資源として定義し、地域の思想と体制を刷新できるかどうか、に、イヌワシと騎馬鷹狩文化の未来が委ねられているといえる。

謝辞

本調査研究の一部は、財団法人高梨学術奨励基金「平成23年度研究助成」「平成24年度研究助成」による研究計画に基づき行いました。高梨誠三郎会長をはじめ、同財団と株式会社丸仁ホールディングスの全ての関係者の皆様に深く御礼申し上げます。また、繁忙のなか長期のフィールド調査を可能にいただきました、カッセル大学エコロジー農学部Dr. Andreas-Buerkert教授とDr. EvaSchlecht教授に深く感謝いたします。

またウルギー市で居室を提供いただいた作家シナイ・ラフメット氏、通訳を担当いただいたご息女アイゼレ・シナイ氏、くわえて調査にご協力いただいたすべての鷹匠と村民の皆様に感謝の意を表します。

文 献

- 相馬拓也 2008. 形象なき文化遺産としての狩猟技術：キルギス共和国イシク・クル湖岸における鷹狩猟のエスノグラフィ. 国士舘大学地理学報告2007 (16): 99-106. <http://bungakubu.kokushikan.ac.jp/chiri/PDF/2008No16.pdf>.
- 相馬拓也 2012a. アルタイ＝カザフ鷹匠による騎馬鷹狩猟：イヌワシと鷹匠の夏季生活誌についての基礎調査. ヒトと動物の関係学会誌32: 38-47.
- 相馬拓也 2012b. アルタイ・カザフにおける鷹狩猟の民族考古学：無形文化遺産としての狩猟方法と技術継承の基礎研究. 高梨学術奨励基金年報 平成23年度研究成果概要報告, 364-371, 東京：財団法人高梨学術奨励基金.
- 相馬拓也 2013a. アルタイ＝カザフ鷹匠たちの狩猟誌：モンゴル西部サグサイ村における騎馬鷹狩猟の実践と技法の現在. ヒトと動物の関係学会誌35: 58-66.
- 相馬拓也 2013b. アルタイ＝カザフ牧畜社会における騎馬鷹狩猟の民族考古学：無形文化遺産としての持続性に向けた複合研究. 高梨学術奨励基金年報 平成24年度研究成果概要報告: 327-334, 東京：財団法人高梨学術奨励基金.
- 相馬拓也 2014a. イヌワシと鷲使いにみる「ヒトと動物の調和遺産」の可能性：モンゴル西部アルタイ系カザフ鷹狩文化の伝統知とその持続性の現場から. 日本地理学会発表要旨集 (2014年度日本地理学会春季学術大会).
- 相馬拓也 2014b. モンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村における移動牧畜の現状と課題. *E-Journal GEO* 9(1): 102-189.
- 相馬拓也 2015a. モンゴル西部アルタイ系カザフ騎馬鷹狩文化の存続をめぐる脆弱性とレジリエンス. *E-Journal GEO* 10 (1): 99-114.
- 相馬拓也 2015b. 鷲使いの民族誌：モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化が育むイヌワシ馴化の伝統知. 文化人類学80 (3): 427-444.
- 相馬拓也 2015c. モンゴル西部バヤン・ウルギー県におけるヤギと牧畜民の新たな関係：「ヤギ飼い」のライフヒストリーから探るアルタイ系カザフ社会の地域開発. ヒトと動物の関係学会誌 41: 47-57.
- ナショナル・ジオグラフィック (日本版) 2012. インドでチョウゲンボウの大規模密猟 (2012.11.28 付) http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/7118/?ST=m_news (last accessed: 2015.10.15).
- 日本弓道連盟 2015. 矢羽の使用に関する準則. http://kyudo.jp/pdf/info/150501_2.pdf (last accessed: 2015.10.15).
- 日本放送協会(NHK) 2003. 地球に好奇心：大草原にイヌワシが舞う～モンゴル・カザフ族鷹匠の親子～：NHKエンタープライズ (群像舎) 制作 (2003年12月13日10:05-10:57放送), NHK-BS2.
- 日本放送協会(NHK) 2010. アジアンスマイル：僕とイヌワシの冬物語～モンゴル・サグサイ村～：NHKエンタープライズ (株式会社グループ現代) 制作 (2010年1月16日18:30-18:50放送), NHK-BS1.
- 日本放送協会(NHK) 2015. 地球イチバン：地球最古のイーグルハンター：NHK文化福祉部制作 (2015年1月29日22:00-22:50放送), NHK 総合.
- ハーディング, ジェイムズ・E (関本榮一・高橋昭三訳). 1993 (1864). シェイクスピアの鳥類学. 東京. 博品社: 68.
- 琉球新報 1999. なくならないサシバ密猟／風習と保護のせめぎ合い (1999年10月27日付) <http://ryukyushimpo.jp/news/preentry-95757.html> (last accessed: 2015.10.15).
- RecordChina (レコードチャイナ) 2007. 保護動物ハヤブサを密漁！外国人容疑者24人を逮捕，強制送還へ！——寧夏回族自治区 (2007年9月25日付). <http://www.recordchina.co.jp/a11546.html> (last accessed: 2015.10.15).
- Beebe, F. L. 1984. *A Falconry Manual*. Hancock House Publishers, UK: 123.
- Campbell, J. 1773. *A Treatise of Modern Falconry*. Edinburgh, Printed by Balfour & Smellie for the author: 137, 143.
- Inter Press Service. 2013. Falcons Love the Taliban (2013年4月2日付) <http://www.ipsnews.net/2013/04/falcons-love-the-taliban/> (last accessed: 2015.10.15).
- Soma, T. 2012a. Contemporary falconry in Altai-Kazakh in Western Mongolia. In *The International Journal of Intangible Heritage* vol.7. ed. A. Cummins, 103-111. Seoul: The National Folk Museum of Korea. <http://www.ijih.org/volumeMgr.ijih?cmd=volumeView&volNo=7&%20manuType=02>
- Soma, T. 2012b. Ethnoarchaeology of Horse-Riding Falconry, In *The Asian Conference on the Social Sciences 2012: Official Conference Proceedings*, 167-182. Nagoya (Japan): The International Academic Forum (IAFOR). http://iafor.org/offprints/acss2012-offprints/ACSS2012_offprint_0271.pdf.
- Soma, T. 2012c. The Art of Horse-Riding Falconry by Altai-Kazakh Falconers. In *HERITAGE 2012 (vol.2): Proceedings of the 3rd International Conference on Heritage and Sustainable Development*. ed. R. Amoêda, S. Lira, and C. Pinheiro, 1499-1506. Porto (Portugal): Green Line Institute for Sustainable Development.
- Soma, T. 2012d. Intangible Cultural Heritage of Arts and Knowledge for Coexisting with Golden Eagles: Ethnographic Studies in "Horseback Eagle-Hunting" of Altai-Kazakh Falconers, In *Proceedings of the International Congress of Humanities and Social Sciences Research*. ed G Tchibozo, 307-316. Strasbourg (France): Analyt-rics.
- Soma, T. 2013a. Ethnographic Study of Altaic Kazakh Falconers. *Falco: The Newsletter of the Middle East Falcon Research Group* 41: 10-14. <http://www.mefrg.org/images/>

falco/falco41.pdf.

Soma, T. 2013b. Ethnoarchaeology of Ancient Falconry in East Asia, In *The Asian Conference on Cultural Studies 2013: Official Conference Proceedings*, 81–95. Osaka (Japan): The International Academic Forum (IAFOR). http://www.iafor.org/Proceedings/ACCS/ACCS2013_proceedings.pdf.

Soma, T. 2014. Eagle Hunters in Action: Hunting Practice of Altaic Kazakh Falconers in Western Mongolia. *Falco: The Newsletter of the Middle East Falcon Research Group* 44: 16–20.

Soma, T. 2015. *Human and Raptor Interactions in the Context of a Nomadic Society: Anthropological and Ethno-Ornithological Studies of Altaic Kazakh Falconry and its Cultural Sustainability in Western Mongolia*. University of Kassel Press, Germany.

Soma, T. and Sukhee, B. 2014. Altai Kazakh Falconry as Heritage Tourism: “The Golden Eagle Festival” of Western Mongolia. In *The International Journal of Intangible Heritage* vol. 9. ed. A. Cummins, 135–148. Seoul: The National Folk Museum of Korea. https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2014s/0/2014s_100122/_pdf.

〈著者略歴〉

相馬拓也（そうま たくや）

東京都生まれ。博士（農学），現在，早稲田大学 高等研究所（WIAS）助教。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)修士課程修了，早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程史学専攻満期退学。カッセル大学エコロジー農学部Watercope Project客員研究員をへてモンゴル西部バヤン・ウルギー県，ホブド県で長期フィールドワークに従事。モンゴル西部アルタイ山脈および中央アジアの牧畜社会を中心とした人文地理学，ヒューマン・エコロジー，生態人類学，動物行動学，民族鳥類学を専門とする。

主 著： *Human and Raptor Interactions in the Context of a Nomadic Society: Anthropological and Ethno-Ornithological Studies of Altaic Kazakh Falconry and its Cultural Sustainability in Western Mongolia* (ISBN: 978-3-86219-565-7). 近年の社会活動に，NHK ドキュメンタリー番組『地球イチバン：地球最古のイーグルハンター』（2015年1月29日放送）の監修・制作協力がある。